

**Beyond Coronavirusを見据えた
福岡の可能性
報告書**

2020年6月開催

Beyond Coronavirus を見据えた福岡の可能性

これからの「Withコロナ/Afterコロナ」の社会を踏まえ、「コロナを乗り越える＝Beyond Coronavirus」に向けた緊急企画「Beyond Coronavirus を見据えた福岡の可能性」を2020年6月30日に開催しました。以下に議論の要旨をまとめました。なお、イベントには約300名を超えるエントリーがあり、集まった収益金の全額を福岡市の「新型コロナウイルス感染症対策支援 ありがとう基金」へ寄付させていただきました。

実施概要

日時：2020年6月30日（火） 19:00～21:00

実施プログラム

第一部 ビヨンドコロナを見据えたまちづくりの方向性

登壇者	福岡市長 慶應義塾大学環境情報学部 教授	高島 宗一郎氏 安宅 和人氏	九州大学 理事・副学長 福岡地域戦略推進協議会 事務局長	安浦 寛人氏 石丸 修平
モデレーター	クロマニオン 代表取締役社長	小柳 俊郎氏		

第二部 ビヨンドコロナ時代の福岡都心のあり方

登壇者	福岡市長 東京建物 取締役専務執行役員	高島 宗一郎氏 福居 賢悟氏	福岡地所 代表取締役社長 福岡地域戦略推進協議会 事務局長	榎本 一郎氏 石丸 修平
コントリビューター	九州旅客鉄道 代表取締役社長	青柳 俊彦氏	西日本鉄道 代表取締役社長	倉富 純男氏
モデレーター	クロマニオン 代表取締役社長	小柳 俊郎氏		

※所属・役職名は当時

第一部 ビヨンドコロナを見据えたまちづくりの方向性

高島 宗一郎氏×安浦 寛人氏×安宅 和人氏×石丸 修平

安宅 縦軸に「密」と「疎」、横軸に「密閉」と「開放」を置く四象限の図で描いてみると、左下にある「密閉×密」のマスが我々の文明的な中心でした。この「密閉×密」のマスの中には、オフィスや役所、電車やバス、レストランやパチンコ、劇場、会議場などの要素があり、長きにわたって我々人類が楽しんできた空間です。おそらくここでGDPの7割を生んできたはずで、それがコロナによって逆に向かう強い流れが起きています。都市化とは逆のベクトルです。都市が消えるということではなく「密閉×密」に疑問が持たれているということでしょう。向かっている先にある右上のマスは「開放×疎」でありこれを私は「開疎化」と名付けました。これまでの「密閉×密」を「開放×疎」のマスへと刷新すること、つまり都市の開疎化がこれからの我々にとっての最重要課題となってきたといえるでしょう。様々な伝染病がこれからも生じてくることを想定すると、ワクチン接種も大事だし抗体の保持状況についてブロックチェーンを活用した見える化などが求められるでしょう。空気を洗う技術やウイルスを拡散しにくくするため土を増やすなども非常に重要になってきます。

一方、私は以前から「風の谷」をキーワードにした未来創造のプロジェクトに取り組んでいます。世界には美しい風景を持つ場所がたくさんありますが、いわゆる限界集落は日本だけでなく

ヨーロッパにも存在していて、それらの地域はだいたい衰退しているようです。日本だけでなく世界的に都市集中の流れが止まらず長きにわたって人が住んできた場所の多くが棄てられつつあるようです。この状態が続くと映画「ブレードランナー」で描かれたように、都市以外には人が住めなくなるのでしょうか。極端に人口の集中したメガシティにしか人は暮らせなくなるのでしょうか。それだけは絶対避けなくてはならないのです。そこで、原因やシステムの課題を探り、様々な知恵とテクノロジーの力も使い倒しながら対応していくことで、人間と自然とが共に豊かに生きようという未来像を探る研究を始めました。宮崎駿監督の作品「風の谷のナウシカ」の舞台の一つである「風の谷」のような未来像です。つまり「都市集中型の未来に対するオルタナティブ」を作っていこうという運動論が「風の谷」なのです。

ただしこれには問題は三つあると思っています。一つはインフラのコストが高過ぎること。二つ目は開疎な場は求心力が持てないということ。三つ目はこのような疎の状態でも文化を生むことが困難だということ。つまり開疎化に向かうには、我々のような都市住民が惹かれる空間をどう作り上げていくかが大事な問題だと思っています。

福岡市は今まで果敢に未来をつくってこられました。コロナによってもたらされた異常な状況下にあっても未来に向けた開疎化の仕掛けや「風

の谷」をぜひともここで作っていただきたいと思います。

安宅教授の話を受け、高島市長、安浦副学長、石丸事務局長を交えた議論へと進みました。

安浦 伊都キャンパスですすでに「風の谷」を実現しています。272%の敷地に建物は16%だけ。さらに100%は自然林をそのまま残しており、本来なら学生や職員が2万人いる環境下に、現在はコロナ禍で、2~3千人だけが活動をしています。その上AIで駆動するオンデマンドの乗り合いバスで彼らを運んでいるのです。これはまさに開疎空間であり「風の谷」の一つの姿だと思います。安宅先生の話をお聞きし、全く何もない50%の土地を有するFUKUOKA Smart EASTにおいて、「風の谷」の考え方をベースに新しい街づくりに取り組むことが大事だと感じました。ただし周りにはすでに密集した街があり、そこを含めてどうやって「風の谷」に変えていくかは大きな課題となるでしょう。一方、時間軸で考えると5年から10年をかけて新しい街を構想できるので、伊都キャンパスの経験も生かして夢を膨らませ、新しいことを経験していく中から全くの更地に新たな絵を描くことができるチャンスを得た、とポジティブに考えています。

石丸 まず福岡は東京の密と比べると「疎」なので、東京の受け皿になりうると思います。また九州という単位でみた場合、周辺に食や文化が豊かな「疎」がたくさん散りばめられているなど、他の地域ブロックと比較しても良い形で都市が分散されていて、そこに多くの人流、物流が動いているという実態がありますので、すでに開疎化に向かっているといえるでしょう。つまり福岡は都市そのものをどうするかということ、リージョンでどうするかという両方の観点から開疎化を受け止めることができる極めてポテンシャルがある都市だと捉えることができるのです。これを FUKUOKA Smart EAST のグリーンフィールドでチャレンジし、With コロナに資する新しいコンテンツを作って実装していくことが重要になってきていると思います。

高島 そのものの更新時期に都市の開疎化を進めなければいけないのだから、見方を変えて新し

い絵を描けるビッグチャンスに恵まれたという考え方をしています。これから天神ビッグバンや FUKUOKA Smart EAST の要素の中に、都市としての機能は持ちながらも、まちやオフィスのスペックとしての開疎化を盛り込むことで、開疎化を実装する日本で初めての街になることができます。みんなの知恵を持ち寄って、アジアそして世界の中のリーダー都市としての具体的な姿を短期間で実現できる街は他にはありません。本当にこれは福岡にとって、ビッグチャンスだと思うのです。

安宅 福岡は海があって、風があってそもそも開疎的な条件が揃っています。歴史的な深さも文化度も秀でています。そこに非常に高いレベルの快適さがあって、食事もおいしく人も優しく奥ゆかしさがあります。この福岡で失敗したらこの国で開疎化を進めるのは無理だということになります。どうやって開疎を作っていくかは結構チャレンジングですが、誰も解いたことはないこの課題をぜひ福岡が解いていただきたいと願っています。



第二部 ビヨンドコロナ時代の福岡都心のあり方

高島 宗一郎氏 × 青柳 俊彦氏 × 倉富 純男氏 × 榎本 一郎氏 × 福居 賢悟氏 × 石丸 修平

第二部では、コロナによって変わる「都心のあり方」について議論いただきました。

問 率直に、リモートワークが進みオフィスの必要性が問われる中、天神ビッグバンや博多コネクティッドなどの都市開発は「大丈夫」なのかと感じている人も多いのではないのでしょうか。

高島 「大丈夫」には2つの意味があると思います。一つは、コストが合うか、入居者がいるか。もう一つは、今後の With コロナ時代に即した新しい都市をつくれるかということです。全てがオンラインで良い訳ではなく、オフラインの意味はこれからもあり続けるし、オフラインで価値を生むような空間、オフィス、都市をつくっていくことが必要なのではないでしょうか。例えば、天神ビッグバンは天神交差点を中心としたエリアの施策ですが、福岡には、博多旧市街、FUKUOKA Smart EAST、セントラルパーク構想などそれぞれにモザイクのように役割があるなかでの天神と捉えるべきです。東京、上海の真ん中に位置する福岡が生き残るすべとして、尖りがないと意味がないと思います。今日のような（官民の）メンバーが大集合できるまちだからこそ、世界に先駆けて価値をつくっていききたいと思えます。

福居 東京では、コロナで再開の方針が変わるような動きはないが、「密な状態に戻りたくない」という心理を受けたオフィスのあり方を具現化しなければならないと考えます。機能更新も兼ねて After コロナに対応するビルをつくることは、むしろチャンスです。

榎本 With コロナに求められる都市開発像は、まだ誰もはっきりとは言えませんが、企業や働く方々があらゆる選択肢を自由に求めている状況です。どんな働き方や暮らし方が良いのか、福岡は様々な選択肢を追い、示していかなければならないと思います。天神ビジネスセンターは2021年9月竣工を控え、いま対策として、空気、トイレ、エレベーターにおいて様々な技術を用いた研究を進めて全力でコロナ対応への変更を進めています。竣工までにどこまで辿り着けるかわかりませんが、精一杯取り組み、天神ビッグバンの2号、3号案件へと引き継いでいきたいと思えます。いま、世界中の企業や働く方々が一斉に「どの都市でどのような働き方をするか」を選んでいます。都市間競争において、世界の優秀な人材にどのような選択肢を示し、惹きつけられるかが問われており、福岡は進化し続け、選ばれ続けなければならないと考えています。

高島 この短期間に計画変更や具体的な対策を打っているスピード感にまず驚きます。このようなチャレンジが重なることで、福岡全体が世界に先駆けた With コロナのまちになっていくのではないのでしょうか。

石丸 機能更新と、コロナを踏まえることを切り分けて考える必要があると考えています。足りないものはしっかりつくっていくことが大前提であり、マネタイズも含めたビジネスとしての部分も整理していくことが必要です。パラダイムシフトの中で、都心のオフィス街ではテレワークに代替できないような創造性を高める場所としての比重を高め価値を作っ

ていくことが求められます。また、ECが融合したリアル店舗など、コロナ対応としても有効なもの積極的に取り入れていくなど、新たな要素を付加的に創出していけると良いと思います。政策やまちづくりにおいては、都心だけでなく、福岡市内や都市圏などに視野を広げて考えることで、コロナに対応していくべきではないのでしょうか。

榎本 グーグルは、テレワークに乗り気ではなく、自分たちのイノベーションは偶然の出会いの産物であると言っています。オンラインでテレワークができる人が、あえてオフィスに出てきて、偶然出会い、重なり合うことで新しいイノベーションが生まれる。そのようなオフィスの使われ方が理想だと思います。そのため、通信や電力、セキュリティなど環境を整えた上で、企業や働く方々が自由に使えるよう、できるだけフレキシブルに対応しようと考えています。

福居 在宅でできることとオフィスの方が良いことを区別する考え方が主流になってきています。現在ほとんど在宅勤務にしているIT系企業の経営者が、「今は過去の『信頼貯金』を食いつぶしながらやっている」と発言しています。出会いやコミュニケーションで企業文化を育み、社員のエンゲージメントを高める「オフィスは出会いの場」という考え方においては、利便性の高いオフィスは必要不可欠だと思います。

問 集まって仕事できない中、オフィス需要があるのでしょうか。今後ビル事業におけるマネタイズは難しくなるのではないのでしょうか。

高島 作業をする場所は、オンラインでも自宅でもどこでもいいと思います。一方で、今後はオフラインでしか価値が出せないものがクローズアップされてくるのではないのでしょうか。良い例として Fukuoka Growth Next では、偶然の出会いによってこれまでなかった価値を生み出せるよう、人が出会う仕掛けを沢山つくっています。全てがオンラインで済む訳ではないでしょう。作業場としてのオフィス賃料は取りづらくなるかもしれませんが、価値を創造する場としてのニーズはあるのではないのでしょうか。効率的に良い出会いがあり、次々と新しい価値を創出していく場をどうつくるかが求められるのだと思います。

石丸 クリエイティブ界隈の方々が、ワイガヤができなくなったと話しています。オンラインでは、ロジカルで論点が明確な話は効率的にできますが、ワイワイガヤガヤがないとゼロからのアイデアは生みにくいということです。高島市長のおっしゃるように価値を創出するための場を今後設計していかなければいけないのだと思います。

問 今後のまちづくりへの思いをコントリエーターの皆さまからお聞かせください。

青柳 地方や郊外の良さが見直されています。そのためビヨンドコロナでは、都市と地方の良さを両方欲張る発想が求められます。福岡は、東京から見ると地方で九州から見ると都会です。九州におけるビジネスや観光の拠点だという視座をもって機能更新し続ける必要があると思います。開疎化を念頭に置きながら、天神・博多で機能更新を一つずつ積み上げていくことは、今後のまちのあり方を示す先進事例になるでしょう。博多は、陸・海・空の交通拠点が集積するエリアであり、世界、全国から集まる来訪者が降り立つ「ゲートウェイ」としての機能をさらに高めていくことが我々の使命だと思っています。オフラインの大切さという意味で、今後も「交流のきっかけのまち」として都市機能を伸ばしていくべきだと考えます。

倉富 福ビル街区の建て替えのコンセプトは、「天神交差点は、人が出会い、文化やイノベーションを生む『創造交差点』」。ちょうど After コロナを迎えるときに天神ビッグバン・博多コネクティッドが開始するということですから、そこには密にならない空間や換気などを織り込んでいるはず。また AI 等を用いた、密にならない公共交通づくりも進めています。日本で最先端のビヨンドコロナのまちづくりができる。シン・フクオカ、シン・テンジン、シン・ハカタにつなげていけるのではないのでしょうか。

高島 価値を生む場所にはデザインが非常に大事だと思います。例えば、Fukuoka Growth Next

なら古い校舎の中でお酒が飲める、デザイン的なソファがあるなどの仕掛けによってイノベーティブな発想が生まれる。あるいは天神ビジネスセンターのように、世界的なデザイナーがつくったビルで発想するから価値が生まれてくる、などです。あまり密にならずに、これまで以上の価値を生める産業構造を、福岡が開発していく。天神ビッグバンはただハードを新しくするものではなく、ソフトが本質で、高付加価値のビジネスが集積できるまちにしていくものなのです。そのためフロアに余裕ができる分、人が少なくても価値を見出させるオフィスをつくらなければならないのだと思います。

榎本 住みやすく、食事美味しく、自然も近いので、現状に満足してしまうことは、反面では福岡の弱点でもあります。いまのままが良いという意見を聞くこともありますが、進化を続けてきたからこそ、若者を惹き付け、福岡市の人口も 160 万人を超えました。集まった若者に付加価値の高い活動をさせる責任もあるはず。現状に満足せずに時代を見ながら次を目指していくべきだと思います。

青柳 まちづくりは、一企業だけでやっていくものではありません。ビヨンドコロナをチャンスとし、産官学民が一体となり「開疎化」を考え、福岡のまちづくりをやっていくべきではないかと思っています。

倉富 「風の谷」が目指す風の通るまちづくり、風の通る天神、電車、バスを全力で目指していきたいと思っています。加えて、民間だけではできない風の通る公共空間を高島市長と一緒に取り組んでいきたいと思っています。

石丸 様々なチャレンジが求められますが、天神ビッグバンや博多コネクティッドには期限があります。コロナを踏まえてこれらの政策や取り組み自体もさらにアップデートしていくようなことも視野に入れて、産学官民が一体となってまちづくりを推進していけるように、FDC でも頑張っていきたいと思っています。

榎本 伸び盛りの若者はオフラインで人材育成されていく方が良いと思います。天神ビッグバンで、福岡に集まる若者が大きく成長できる場ができるよう、企業誘致にも力を入れていきます。そのためにもコロナ対応が万全なビルを建てていきたいと考えています。

高島 死者数が多い欧米と比べて、日本はオールドノーマルに戻ろうとする力が強く働くのではないのでしょうか。仮にコロナのワクチンができて、新たな感染症が出現する可能性もあります。私たちは常に変わっていかなければなりません。開疎でもやっていけるだけのイノベーションを社会に実装できるよう、今後も意思を持ってイノベーターの後押しをしていかなければいけないと思います。そのためにもこれからの感染症時代に合わせたまちづくりを進めていく決意です。石丸事務局長のお話の通り、一度決めた政策は絶対（変えない）といったことはしないつもりです。これまで想定していなかった状況が天神ビッグバン、博多コネクティッド、FUKUOKA Smart EAST にも及んでいるので、今からでも With コロナのコンセプトをしっかりと埋め込んでいきたいと考えます。そうすることで東京・上海に囲まれた福岡が存在感をしっかりと勝負できる場所になるという意気込みをもったうえで、事業者の皆さんと一緒にやっていきたいと強く思っています。

